

# The Gallery voice

NO-31

編集・発行／画廊沖縄 〒901-1114 沖縄県南風原町神里 373 TEL / FAX(098) 888-6117 / 2007.9.13

Gallery Okinawa / 373 Kamisato Haebarucho Okinawa JAPAN WWW.GalleryOkinaw.Com

## Home

与那覇大智

2005年の9月から1年間、フィラデルフィアに滞在した。アメリカの東北部にある、1776年に独立宣言が採択された、この国では最も古い町のひとつである。そこで私は大学に籍を置き、わずかな授業を受け、かなりの量の制作をし、スタジオとアパートとの往復の間に雑事をした。なれない異国の地で平凡な日常を、あえて過ごすことを旨として、日々を暮らした。

私のアパートはウエストフィリーと呼ばれる、市の中心から少し外れたところにある住宅街にあった。びっしりと立ち並ぶ家はどれも古く、外観はビクトリア朝の優雅なデザインだが、パステルカラーの壁は近づいて見ると、はげたペンキの上に強引に何層にもわたって塗り重ねた跡が歴然としていた。配管や暖房設備も古く、故障と補修は日常茶飯事だったが、老朽化からくる不便を、彼らはさほど気にも留めていないようだった。

私の下宿の斜め向かいの家は、改装工事をしていた。トラック数台分の瓦礫が、家の中から運び出されたが、外壁はそのままだ。家の外見はそのままだに内装を丸ごと入れ替えるつもりらしい。彼らは家を大切に使う。築100年近い家はざらだ。彼らにとって古いものを守るのは、くたびれたボイラーを修理しながら使うのと同じくらい、当たり前なことであるようだ。数ヶ月続いた改装工事は、結局私が帰国する日が来ても、終わることはなかった。

街全体の区画も古くから変わらない。碁盤目のような整然とした区画は、この街がつくられた当初からのものだ。家はほとんどが道沿いに、道路に正面を向けて建っている。だから区画の中央は、ドーナツの穴のようにぽっかりと開いていて、そこは裏庭になっていた。各家の敷地ごとに金網で仕切っているだけなので、裏庭に立つと、ドーナツの穴全体が見渡せる。広い裏庭は森のように木々がうっそうとしており、そこに住まう小動物たちも何世代にもわたりそこを住处としていた。裏庭の真ん中に立って見上げると、いささか育ち過ぎたプラタナスが、空を丸く縁取っていた。それは小さく、遠く見えた。自分が深い井戸の底にいるように思えた。空が漆黒になる頃、足元の草の葉裏から蛍が湧き出した。全米第五の大都市の裏庭である。蛍は私の頭を飛び越え、星空にのけていった。異国の地に居ながら深い安堵感と、なぜか不思議な懐かしさを感じた。

滞在中、多くの美術館でアメリカ絵画を見てきた。私が興味を覚えたのは、戦後美術のスタンダードとなった抽象表現主義やポップアートなどではなかった。私は本来これらの研究をする、という名目でこちらに来たのだけど、以外にも、むしろそれ以前の、ヨーロッパ絵画の後塵を拝していた頃の、何の変哲もない風景画や肖像画に言いようのない共感を覚えたのだった。おそらくアメリカ国外で展示されることなどあり得ないであろう、平凡でローカルな、時には稚拙さすら感じる絵。あれらの

絵が共通して持っている、深い喪失感についてどのように書いていいかわからない。だが、それは間違いなく私の内なる空虚に通じていると、直感したのだった。

帰国まで2ヶ月となった6月のある日、沖縄の新聞のHPの記事が眼に入った。2008年度末をめどに返還予定の米軍泡瀬ゴルフ場に、大手スーパーが出店するというものだった。その記事を読んだとき、容易に想像がつくその景色の行く末を思ったとき、私の中で何か失われた感じがした。泡瀬ゴルフ場は、子供の頃の私の遊び場だったのだ。無邪気な頃を過ぎ、沖縄を離れてからも、金網越しのゴルフ場は変わらなかった。思うに、私の記憶と今私の眼に映る景色の間に齟齬のないものは、すべて金網越しなのではないか。仮にも米軍の施設である。社会的な感情がそれに対して否定的であることは分かっている。しかし私にとって、今まで消えることなく残っていたものが、ついに失われ、去っていく。このことに対して、惜別の念を持つことは許されるだろうか。



「或る小説家へのオマージュ」 油彩 F30号

翻って、金網の手前の世界はどのようなであったか。私の内なる世界はどのようなであったか。そしてこれから、どのようなふうになっているのか。窓の外を見ながら途方にくれたのが、昨日のこのようだ。

(画家/よなは たいち)

## 与那覇さんの絵と空

大谷省吾

与那覇さんから個展のお知らせをいただくたびに「おっ、今度はどんなふうに変ったかな」とわくわくさせられます。追究していることは徹底して一貫しているながら、毎回、必ず何か新しい展開を見せてくれるからです。それでも今年4月に東京銀座のOギャラリーで開かれた個展では驚かされました。まずはこのときのことを思い出しながら、与那覇さんの追究している絵画の特質について、考えてみることにしましょう。

4月の個展で、入って正面の壁に展示されていた作品は、黒い画面上に白い細かな点々がちりばめられた図柄で、私は初め「今度は、星空を描いたのかな」と思いました。ところがよく見ると、どうも星空とは印象が微妙に違うのです。不思議に思いながら、しばらく画面を見つめていると、白い点々に独特の偏りがあることに気づきました。密集しているところとまばらなところ、あるいは線状に連なっているようなところ、そうした点々の特徴を見ているうちに、これは星ではなくて、人家の灯りなのではないかと思に至りました。夜中に空港から離陸した直後、あるいは着陸する直前に、飛行機の窓から見下ろしたときの夜景のように見えてきたのです。与那覇さんに尋ねてみると、国土院が発行している大きな地図を使い、人家を示す場所に穴をあけていって、黒い下地を塗ったキャンバスの上に置き、その上から白い絵具を擦り込むのだそうです。そうすると、ステンシルのように人家の部分が白い点となって黒いキャンバスの上に跡づけられるわけです（さらにその後、水や絵具を流すなどの手も加えられます）。

与那覇さんは、久しぶりに帰郷したときに感じた「自分の記憶と現在の街の齟齬」と、文化庁の留学制度でアメリカに滞在したときに感じた、自分にとってよそよそしいものであったはずの米軍施設への郷愁という奇妙な体験とを重ね合わせ、その感覚を確かめるように、この地図の仕事に取り組んだそうですが、その制作方法は、これまでのような、丹念な塗りの繰り返しによって、画面に奥行きのあるイリュージョンを生み出していた方法とはかなり違います。けれども、描き方は違うのですが、私は最初に見たとき、やはり星空のような錯覚を受けました。つまり、ある広がりのある空間に見えたのです。この錯覚は、与那覇さんの絵について考えるときの、ひとつの入口になるような気がします。

私たちが夜空を見上げたときに、目の前に広がる無数の星たちは、実際には私たちの住む地球から、さまざまな距離にあるということを、私たちは知識として知っています。けれども、そうした

予備知識なしに夜空を見れば、ある平面上に光の点々が散らばっているように見えることでしょう。ちょうどプラネタリウムのスクリーンの上に、星の映像が投影されるように。

与那覇さんが追究しようとしている絵画のあり方は、こうした星空の見え方とちょうど反対なのではないかと

思います。絵画は、キャンバスという物理的に存在する平面の上に絵具を塗っていくことで、あるはずのない奥行きのあるイリュージョンを見る者に感じさせることになるからです。無限の奥行きをもちながら、平面のように見える空と、ただの平面でありながら、無限の奥行きを感じさせようとする絵画。与那覇さんが空や雲を描くことが多いのは、空と絵画とが、こうした対照的かつ相補的な関係にあるからだと思うのです。4月の個展での作品は、すでに述べたように実際は地図をもとにしていましたが、やはり星空を連想させてしまう、そうした多義性も、絵画のもうひとつの面白さといえましょう。



Oギャラリー個展（2007年4月・東京）

さて、このたびの個展で、与那覇さんは再び雲に取り組むようです。しかも、それは雲海とでもいべき圧倒的な光と影のスペクタクルになるらしい。雲という存在が、大気中の水分が光を乱反射させて見える現象であることを思い起こすならば、絵画においてそれは、空間のイリュージョンをどのように発生させるものとなるでしょう。

（東京国立近代美術館主任研究員／おおたに しょうご）

## 与那覇大智 個展によせて

佐藤文彦

与那覇大智と私のはじめての出会いは1986年4月である。この年、待望の沖縄県立芸術大学が開学し、与那覇も私も絵画専攻の第一期生として共に入学、4年間苦楽を共にした。開学当初は絵画専攻の施設がまだ整っていない状態で、一般教養の教室で制作するなど絵画を学ぶ環境としては充分恵まれてはいなかった。しかし、学生たちは難関を突破した第一期生としての自負心があった。また、沖縄からアジアへ独自の世界観と表現形態を発信して行くという開学理念を重要視している先生方の情熱的指導に支えられ、物質的な不満足感を乗り越えていった。

与那覇と出会ってからの印象は今も変わらない。彼は何ごとにおいても真摯に受け止め決して曖昧な妥協を許さない潔癖なタイプ。同時に独自の絵画観をもっていてそれは作品にも表わされていたと思う。入学当初は概ねデッサンを中心とした課題が多かった。彼の描くデッサンは私が予備校で学んだものとは違い非常に独創的な描法だったという記憶がある。今思うと彼の独自の絵画観がそれにも反映されていたのであろう。とくに印象深いのは、裸婦モデルを描いた作品だった。当時の私のデッサンに対する認識では、対象物を正確に写し描く古典的な描法を駆使するものだと思っていた。その技法はレオナルド・ダ・ヴィンチを代表とするルネサンス様式の素描法で、細い平行線によって表わす陰影法で物の形や本質を表現する技術であったのだが、彼のデッサンだけは他と違って周囲を驚かせたものである。それは、横たわる女体を大きな肉の塊のように描き、さらに黒々と濃淡を施していた。それをみた時は皆仰天して与那覇の美的感覚について善くも悪くも講評し合ったものだ。しかし、その後、写実表現に拍車がかかり次々に大作を描くようになっていくと誰もが彼の作品に注目するようになった。

与那覇自身も気にしていたと思うが、大学在学中の作品は父である著名な画家与那覇朝大の影響が大きかったようだ。朝大画伯の油絵作品は沖縄の風景や琉球舞踊などの人物画を油絵具で写実的に捉える作風であるが、その構図、描写力は他の追随を許さないほどの高度な技術が発揮されていた。そのキャリアは戦後の苦しい時代に米軍基地に出入りしては米兵の似顔絵を描き生活の糧にしていたという経験から人物の描写には特に迫真があり、琉球舞踊家や政治家などから多くの肖像画制作の依頼があったようだ。与那覇はそんな父親の仕事場を見て育った環境にあったのだと思う。

与那覇の絵画研究は凄まじいもので、その頃から絵画制作だけの生活が身についていた。当然作品の数は多くなり内容的にも完成度が高く、私や彫刻専攻の同期生とグループ展を開催した時も与那覇作品のインパクトは強烈だった。

大学での4年間はあっという間に過ぎ、与那覇は写実作品としての集大成「鳥瞰」を卒業制作とした。作品は150号大のキャンバス空間に天空より大地を眺望する構図で、作品を観る者が鳥の目線になり大空を飛んでいるような浮遊感覚になる。そのアイデアと描写テクニックには目を見張るものがあった。

卒業制作とともに我々はその後の進路について考えなければならなかった。私は指導教官であった宮俊彦教授の勧めで東京芸術大学大学院に進学し、与那覇は一年

のち筑波大学大学院に進学した。与那覇の場合、自分の作品や技量について厳しく評価、指導してもらい不足を補うための修業の場として選んだのだろう。その選択は的中し大学院時代に大きな飛躍をはたした。

その成果の最初は、スペイン写実主義レアリズムの代表的画家アントニオ・ロペス・ガルシアなどに影響されたとされる作品を描いた頃に見られた。意識的に彩度を落としたモノクロに近い色彩で部屋のドアやチューリップなどのモチーフが印象に残っている。

次は、1990年に沖縄出身者や沖縄に関連した若手アーティストで結成したグループCHURAのメンバーとして5年間参加した時のことである。その頃になると次第に写実表現に対して疑問を抱きはじめる。その葛藤は数年間続いたようだ。目に見える現実世界とそれとは違うもう一つの世界への魅惑。瞬間に感じられるイリュージョンの世界へのアプローチであるが、この非現実的な境界は一步でも踏み違えると大気圏の中にバラバラに分解されるような繊細で危険な領域でもあった。描かれた作品は写実的な対象物がまるで霧がかかのように消えてゆくぼんやりとした印象へ変容する。また、形があるようでないような雲をイメージした作品へ変化してゆき一見抽象表現にも見える作品を発表してゆく。



「銚子の海—sea scape of chosi 1~V」

okinawa open air exhibition 1992. 与那覇作品（百名ビーチ）

1992年より参加した若手作家現代美術交流展では、インスタレーションという新たな領域にも挑戦している。これは会場となった玉村百名ビーチの波打際に海にむけてM150号大の額縁を5枚並べた作品「銚子の海」で、額内に瞬間的に見える景色を絵空事の絵画としてみせる試みであったが、一貫してキャンバスへの描写にこだわる与那覇の唯一のインスタレーションということで、この経験がその後の作品にも影響を与えているという。

1995年4月より私は非常勤助手として沖縄県立芸大に戻ることになり、与那覇の作品と直に接することができなくなったが、その後の便りで近況を知ることができた。第11回ホルベインスカラシッパ奨学者(1996)、第27回現代日本美術展・賞候補(1998)、第4回アート公募・審査員賞(1999)、VOCA展2000などの美術賞に選ばれ、ライフワーク的テーマの「光の匂い」で毎年行う銀座での個展で作品発表を続けている。2005-06年のアメリカ・フィラデルフィアのペンシルバニア大学での研修を終え、再び写実表現や沖縄と向き合うなどさらに変化した今回の与那覇の作品に注目したい。

(画家/ さとう ふみひこ)

## 県立美術館の展望と期待について

横田和美

県立美術館の展望と期待について……。このことを語るに私はふさわしくないかもしれないが、沖縄の美術界への思い入れは少なからずあるので書かせていただいた。周知の通り、美術館の建物は完成し、「沖縄県立現代美術館（仮称）」から“現代”の二文字が消されて正式に「沖縄県立博物館・美術館」となり、副館長や学芸員増員の人事がなされ、沖縄タイムス社の関連会社「沖縄文化の杜」とビル管理会社で構成される指定管理者へ指定書交付を行い、あとは11月のオープンを待つだけである。

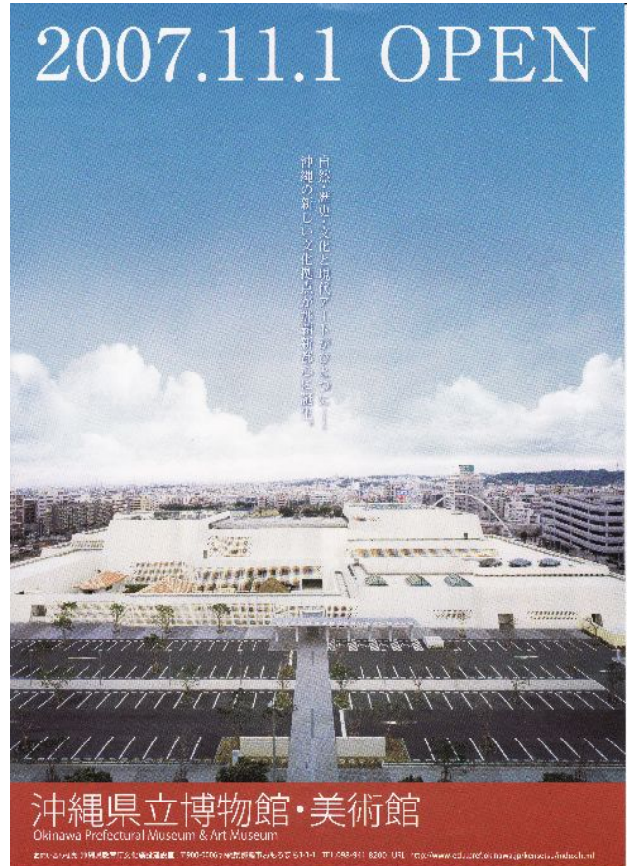
県民サイドによる美術館建設をめぐる問題提起は、シンポジウム開催や署名運動といったかたちで過去に何度も行われてきた。にもかかわらず、管轄の県教育庁は開館を目前に美術館の運営方針にかかわる要件を秘密裏に決定付けようと企て、そのことに危機感を抱いた美術関係者らの訴えにも耳を貸さず、県教育庁の都合のいいように書き換えた条例案を昨年暮れに開かれた県議会で採決させた。このことは県民の美術館建設への思いを無視した、いや踏みにじった行為であり、十分な議論はおろか説明責任さえ果たしていなかったという点においても多くの疑問を残した。

前置きが長くなってしまった……。

さて、美術館の展望と期待についてだが、美術館の仕事は展示会の企画運営、教育、研究、収集管理など、専門性を要しつつ多岐にわたるのだが、私たちの美術館には、どれだけの専門性を有しているのか実態のつかめない指定管理者の導入が決まっている。加えて、がんじがらめの行政の論理と採算性を迫及する企業（指定管理者）の性格を思えば、そこで開催される企画展が質的にどのようなものになるかは想像に難くない。そのような状況下であえて希望を見いだすとしたら、戦後の荒廃した沖縄で「沖展」という美術展を立ち上げ、美術を通して戦争で深い傷を負った人々に復興への勇気と希望を与えた、沖縄タイムス社の関連会社が指定管理者ということだろう。

今年で60回目を数えた「沖展」は、確かに形骸化が指摘されて久しいが、そのことについては新聞社内部からも問題提起する形で座談会や特集が何度もなく組まれてきた。そのマスコミとしての批判精神、沖縄の文化振興の一端を担ってきた事業を60年も継続してきたという自負心に私は賭けてみたい。批評の重要性という点に考慮が及んでいるのであれば、仮に美術館での企画展が数的に成功したとしても、成功を証拠だてる内容だけ

を作為的に選択するのではなく批判の声にも耳を傾け、中立の立場で率先して評論活動も展開していこう。そのことに期待を寄せたい。



### 県立博物館・美術館開館ポスター

11月1日の県立博物館・美術館のオープンは、県内外からマスコミが押し寄せにわかに注目されることが予想されるが、問題はその後である。博物館とあわせて総事業費二百五十億円もの税金を投じた建物をただの箱にしてはならない。「美術館とは敵対するのではなく、新しい回路を作り上げるべき」との今年3月に開催されたアートNPOフォーラムにおける熊本市現代美術館館長の南郷宏氏の発言にもあるように、美術館をただの箱にしないためにも、この美術館取り巻く混沌とした状況を一度リセットして、何らかの新しい回路を作り上げる必要がある。そのためには、マスコミの積極的な関わりは不可欠であり、教育庁も上から目線や口先だけではなく美術館活動の環境を整えるためにも少しは柔軟に対応すべきである。自らの文化を検証し、時には批評し、継続して美術の可能性を探り続けることが私たち現代に生きる者の役割であり、美術館は未来へ向けて開いていかねばならないのだから。

(WEBデザイナー／よこた かずみ)

# TAICHI YONAHA



## 〈与那覇大智について〉

昨年の夏、文化庁新進芸術家海外留学制度による米国（フィラデルフィア）の一年間の留学生生活を終えて帰国した与那覇大智。その帰朝報告展とも言える個展を、今年4月東京の0ギャラリーで開いた。テーマが「光の匂ひ」から「Home」へ変わった。私はその個展を観る事は出来なかったが、風の便りで、作風がやや表現主義的な作風に変化し、観客の評価が二分したという。

米留学中、しばしば与那覇氏からメールをいただいた。古いアメリカの風情を残すフィラデルフィアの街並み。そのアパートの中庭（小さな森）の身近にある野生のリスたちの様子。庭にそびえる大木の樹間から円形に広がる天空のあまりにも美しい星空。たびたび通う中華レストランのチャームिंगな女店員の話など、日本（つくば市）で創作活動に明け暮れる与那覇氏から送られるメールとはまるで別人のような、開放感あふれるものだった。さわやかに饒舌に視覚的に語るメールは、私のこれまでの「寡黙な与那覇大智」イメージを大きく変えるものだった。

また、フィラデルフィアの人々の生活風景から、かつて与那覇が少年時代を過ごしたコザ市（現沖縄市）に隣接する、金網のフェンスの向こうの米軍家族の生活風景が重なり、古里の沖縄を思い出したという。つくば大学大学院を卒業して、つくばの地を離れることなく十数年制作拠点にしている与那覇にしてみれば、留学地の米国で自己のいにしへの匂ひに触れる機会になったことは想定外だったに違いない。

帰国後、テーマが「光の匂ひ」シリーズから「Home」へ変化したのも前述の米留体験がもたらしたものであろうか。

さて、私が与那覇氏の作品に接したのはいつだっただろう？ 県立芸代時代だったか？ 卒展だったか定かではない。父親（画家 与那覇朝大氏）の超写実主義の影響を感じさせる作品だったと記憶している。しかし1992年玉城村百名ビーチで開かれた第二回若手作家現代美術交流展の作品は目を疑うほど大胆な発想の作品だった。与那覇大智はあえて沖縄百名の海で、「銚子の海Ⅰ～Ⅴ」インスタレーションの作品を提示した。海の水平線を借景に150号の額縁5点を設置しただけの作品だった。たえず変化する額縁の中のリアルな風景。これまで自身の描いてきたキャンバスのリアルと、このインスタレーションの額縁の中のリアルと何がどう違うのか？ 自問しながら確かな何かを確認したことだろう。

以後5年ほど大学の非常勤講師や専門学校の講師をしながら制作に打ち込む生活をする。しかしより充実した制作時間を見い出すべく、美術関係の仕事や講師を一切辞め、朝4時に起き5時出勤、午前10時退勤する、美術とは全く関係のない単純労働の荷分け作業の生活スタイルにシフトし制作活動に励む。その生活は米留帰国後の現在も変わらず10数年も続けている。本業の美術の創作は、お昼のあと日が暮れるまで毎日キャンバスに向い、9時には床に着くという。余談になるが、私は幾度となく父様の与那覇朝大氏のアトリエを訪ねる機会があった。大智氏の徹底した芸術家の生活風景は父の朝大氏を見るようだ。

1998年「光の匂ひ」0ギャラリー（東京）の個展にはじまる同シリーズは東京の現代美術シーンで注目され、第3回アート公募準大賞受賞など数々の賞を受賞。VOCA展2000にも選ばれ、期待される若手作家として名を記した。

今展は与那覇大智氏の2002年の沖縄での初個展「光の匂ひ」（画廊沖縄）以来5年ぶりの個展である。4月の東京の個展と同一のテーマ「Home」シリーズで帰朝展といえよう。前述の米留学によって与那覇氏の内面にどのような変化が起きたのだろうか。観るものを新たな未知なる世界へ誘ってくれるに違いない。

（画廊主/上原誠勇）